

スペンサーのアレゴリー —とくに「妖精の女王」(神聖)を中心として—

佐竹 龍 照

I

「妖精の女王」(The Faerie Queene: 1590)の基本構造には「連続するアレゴリー」(a continued allegory)と「歴史物語」(a historical fiction)の二面がある。「歴史物語」にはロマンスの世界が織り込まれており、騎士の冒険と恋物語が展開する。もちろん恋の成就には多くの困難と冒険が伴うことはロマンスの世界の常石である。しかしここでは「妖精の女王」がアレゴリカルな詩であるというところに焦点をあててみてゆくことにしたい。

スペンサーにとって「妖精の女王」の主要な目的は「紳士の道徳的訓育」(noble person in virtuous and gentle discipline)⁽²⁾を施すことにあったといわれている。ヒューマニズムの運動に伴い、エリザベス時代の思潮は倫理学があらゆる学問の中心であった。そうした状況のもとで、詩が「語りかける絵」(a speaking picture)⁽³⁾と喩えられたのも、そこには倫理的意味が内包されていたからであり、さらに教化の理想に叶うため詩は「楽しい教訓」(delightful teaching)⁽⁴⁾でなければならなかった。こうした文学理論を支えるものにアレゴリーという手法がある。アレゴリーは中世文学の重要な文学手法であったけれども、エリザベス時代の文学にも踏襲され、重視された文学手法の一つであった。特にスペンサーはアレゴリーの傾向の強い詩人であり、そのアレゴリーの手法を用いて大成させた作品が「妖精の女王」(全六巻)なのである。スペンサーのアレゴリーは主として倫理学を基盤として成立している。そのことは「妖精の女王」の主要な目的が「紳士の道徳的訓育」にあったからであり、そのアレゴリーの手法を用いてアリストテレスの「十二私徳」(twelve private moral virtues)⁽⁵⁾完備の理想的騎士を描き出すことだったのである。しかし実際にはキリスト教的倫理観、道徳観を中核として作品は構成されているのである。ここでいう紳士とは単に当時の文化人のみを対象としているのではなく、広く国民一般を意識している言葉と解さなければならない。なぜならばアレゴリーの手法がすでにそのことを含蓄しているからである。例えば善悪という相対立する抽象概念をそのまま抽象的に論じた場合、読者層が限定されてしまうことは明白であろう。一般読者の理解度を高めるためには、誰にでも理解し易くしかも興味をそそるものでなければならない。そのためには抽象を具体化し、具象化しなけれ

ばならない。善なる徳目があたかも血肉をもった人間であるかの如く描き出されるのはそのためである。端的に言えば、アレゴリーとは抽象的なものをあたかも具体的なものでもあるかのよう
に描き出す手法のことで、そこでは当然擬人化が行なわれることになる。

「妖精の女王」は「神聖」(Holiness)を代表する赤十字騎士(Knight of the Red Cross)の物語ではじまり、第二巻では「中庸」(Temperance)の騎士ガイアン(Sir Guyon)の物語となる。第三巻では「貞節」(Chastite)を主題としてブリトマート(Britomart)を描き、第四巻はキャンベル(Cambel)とトライアモンド(Telamond)の「友情」(Friendship)の美德を扱い、第五巻は「公正」(Justice)の騎士アーテガル(Artegal)を主人公とし、第六巻は「礼節」(Courtesie)の騎士キャリドア(Calidore)の物語となっている。そして各巻にはそれぞれのアレゴリーを明示する場が設定されているのである。第一巻においては「神聖の館」(house of Holiness)がそれにあたり、第二巻では「至福の園」(the Bowre of blisse)、第三巻は「アドーニスの園」(the Gardens of Adonis)、第四巻は「ヴィーナスの社」(Great Venus Temple) 第五巻は「アイシスの社」(Isis Church)、第六巻は「アシディルの山」(Acidalian Mount)となっており、それぞれがアレゴリーの傑出した場面となっている。さらに重要なことはこれら各場面が互に対比し、類似し合⁽⁶⁾って「妖精の女王」という一大叙事詩を構築していることである。「連続するアレゴリー」の「連続する」という言葉の意味も実はその辺にあるといたい。「妖精の女王」であるグロリアーナ(Gloriana)もその名が示すように「栄光」という美德を表わしていると同時に、エリザベス女王をも表わしている。つまり栄光に輝くイギリス国王と同時にエリザベスという高徳の美女の意味も兼ねているのである。そのアレゴリーは主要な登場人物を通して各巻に反映しているのである。例えば第一巻におけるユーナ(Una)も第二巻におけるベルフィービー(Belphoebe)も第三巻のブリトマート(Britomart)にもその身分が反映しているといえよう。また各巻の主人公たちも妖精の女王に仕える有徳の騎士であると同時に、それを象徴する美德そのものでもある。各騎士は等しく妖精の女王グロリアーナの指示に従い、それぞれの目的に向って冒険の旅に出るのであるが、その過程には幾多の困難が彼等の前進を阻むのである。美德を阻止するのは悪の力であることは言うまでもない。各騎士はさまざまな悪の誘惑を避け、あるときはそれと戦い、打ち斃して美德の威力を発揮する。しかしここで注意しなければならないのは各騎士に敵対する悪の力が外敵である場合と、彼等の心の中に浸潤している内敵である場合もあり得るのである。善か悪かという図式は単純明快な論理で組み立てられていなければならないが、そのためにかえって論理の硬直化がおり、さらに図式化の陥ち入り易い単調な構成力となる危険性もでてくる。そこにはアレゴリーの越え難い限界というものが感じられてくる。アレゴリーが如何に具体化され、具象化されてリアルな姿となっても、先行する思想によってその具象性は限定されてしまう。それがアレゴリーの宿命なのかも知れない。たしかに中世文学に

みられるアレゴリーは単純明快な論理を骨組みとして成り立っていた。しかしスペンサーのアレゴリーは従来までの単調なアレゴリーとは異なって、複合化されたアレゴリーとなっており、多様な効果を生み出しているのである。つねに抽象と具体との均衡と融和が守られ、しかも緊密な構成をもって展開してゆくのである。各巻にみられるさまざまなエピソードの設定もそうした作者の配慮から考案されたものであり、各主人公が代表する美徳の真の意味を明示するための補助的役割であると共に、各主人公が織り成す複雑な人間ドラマの陰影の効果ともなっているのである。拙論では「神聖」という主題に対してアレゴリーの構造が如何なる機能を果しているかという点にその中心がある。それには先ず神聖という主題を構成しているプロットから焦点をあててゆきたい。

II

「妖精の女王」(第一巻)における「神聖」(Holiness)は「赤十字騎士」(Knight of the Red Cross)となって登場する。しかし一見して気づくことは表題が示す「神聖」の騎士とは最初から完成された騎士というよりも、むしろ在来の一般的騎士の姿として現われているということである。実はそこにこそスペンサーのアレゴリーの鍵があるのである。もしも「神聖」即「赤十字騎士」であれば、悪の誘惑を避けることも墮落することもないであろう。真の神聖の在り方を問い、そこから神の愛を獲得するところに「第一巻」の主題の中心があるのである。したがって赤十字騎士とは「神聖の騎士」ではなくて、「神聖を探究する騎士」と言った方が理解し易いかも知れない。騎士に課せられた冒険とは、つまり神聖を探究する意味なのである。未完成は完成を志向する。飽くなき探究によってのみ神聖に達することができるのである。罪ある者が真の信仰への出発点となるのもそのためであろう。

スペンサーの描く神聖の騎士とは、実は最初から罪を背負った騎士なのである。その罪とは人間が等しく背負わされている原罪のことなのである。アダムによる原罪は第二のアダム(キリスト)によって贖罪されるように、人間の墮落は神の恩寵によって救済される。ちょうど赤十字騎士が「悪竜」に打ちのめされたとき、「再び立ち上がる」(up lightly rose againe: I. XI. 17)ように、キリスト教徒は一つの過失のあと再び自己の探究を進めることが約束されているのである。つまり「妖精の女王」(全六巻)において「神聖」が他の美徳に先行して「第一巻」に描き出されているのはそのためである。それを前提としなければ「妖精の女王」(全六巻)における各々の美徳は決して成立しないことになってしまう。もしも赤十字騎士がアーサー王子によって巨人オーゴリオ(Orgoglio)から救出されなかったならば、続いて起る冒険は何の意味もなくなってしまうであろう。また「第二巻」以後の各主人公は赤十字騎士のそうした立場から出発しているともいえるのである。各々の美徳を追求することによって自己の信仰への道が達せられ

るのである。

このように「神聖」がもたらす影響は実に広範囲に渡っているので、そこにみられるアレゴリーも極めて複雑多様なヴァリエーションを伴って人間経験の諸相を描き出してゆくのは当然といえる。赤十字騎士が聖ジョージ (St. George) と結びついた場合はイギリス国教会とローマ・カトリック教会との対立という歴史的アレゴリーとなり、また赤十字騎士を探し求める ユーナは「ソロモンの歌」(the Song of Solomon) に示されているように、「キリストの花嫁」(the Bride of Christ) のアレゴリーともなる。さらに赤十字騎士やユーナと相対立するアーキメィゴー (Archimago) やデュエッサ (Duessa) は共に異教的神話やそれに付随するファンタジックな伝説から派生した人物で、「偽善」、「分離」のアレゴリーとなる。特にユーナとデュエッサの場合はその名が示すように、「統一」(unity) と「分離」(division) を意味する。すなわち歴史的アレゴリーとしてみた場合、イギリス教会がローマ・カトリック教会の弾圧によって「分離」され、再び「統一」してイギリス国教会を設立するという意味になる。また倫理的アレゴリーとしてみた場合、唯一無二の状態から人間の墮落が生じ、一なる心 (ユーナ) が分離された「二心」(デュエッサ) を意味するアレゴリーとなる。そしてその迷妄のなかを彷徨する一人のキリスト教徒 (赤十字騎士) がさまざまな試練を克服して、ついに真なるものを獲得し真の信仰に立ち帰るといふアレゴリーなのである。特にそのなかで最も顕著な点はアレゴリーの心理的面である。赤十字騎士の行動を示す諸機能はすべて倫理的註釈を提供しながら進行してゆくのである。

赤十字騎士はキリスト教の洗礼を受けた青年騎士ではあるが、まだ、武器を手にしたことがない。そのために彼は「自分の新たな武力を学びとるために」(his new force to learn: I. i. 3) 冒険に出かけるのである。つまり彼の冒険とは彼の教育過程を意味するものでもある。またこの場からはエペソ書 (Ephesians)⁽⁸⁾ における比喩的武器の影響も感じられてくる。ともかく「第一巻」におけるアレゴリーは心理的面と同時に神学的面を合わせた複合的アレゴリーなのである。冒険における赤十字騎士は「主の受難の尊い形見」(the dear remembrance of his dying Lord: I. i. 2) である「血の十字架」(bloude Crosse: I. i. 2) を胸当として身につけているのも、また彼の楯に同じ印がついているのも、そのアレゴリーの作用からであった。赤十字騎士はユーナと小人に伴なわれている。ユーナの役割は「真理」(Truth) の擁護者であると同時に「恩寵への指針」でもある。さらに神学的解釈を拡大してみた場合は、墮落以後の人間にかすかに残っている「聖なる閃光」とも感じられてくる。ユーナが顔をヴェールで覆い黒の長衣を纏っているのも悪の力によってエデンの園を追われた両親たちの悲劇のためであった。また「誰にも自分の姿をはっきり見せず、他の者の姿もはっきり見ることができない」(Where plaine none might he see, nor she see any plaine: I. i. 16) という言葉からは、ユーナにもその罪の一面が存在するからだという解釈も成り立つかも知れない。「肩に背負ったユーナの荷物」(her bag/Of needment

at his back: I. i. 6) で運び疲れている「小人」(Dwarfe) は「分別」(Prudence) または「理性」(Reason) を示すアレゴリカルな人物である。またエリザベス朝の見方をすれば、霊と肉との「仲裁者」としての役割であり、理性が人間の行動を導き出すところの補助的存在であるとも考えられよう。

小人は疲れているために、赤十字騎士やユーナよりもはるかに遅れて歩いている。当然ここで気になることは彼等三人の順位なのである。先頭に立っているのは「猛りたつ馬」(angry steed: I. i. i) に乗っている赤十字騎士であり、続いてユーナ(真理)となり、最後に小人(理性)の順となっている。正常な順位からすれば当然ユーナが先頭に立ち、次に小人が続き、赤十字騎士は最後の順となり、なお騎士の馬は正しく制御されていなければならなかったはずである。しかしそこにはスペンサーの意図があることに注目しなければならない。墮落した人間の状態を示すためには正常な順位(位階)の顛倒が必要なのである。そうすることが過失に向う人間の姿をより鮮明に描き出せるからである。そしてその過失はただちに悪を象徴する森によって暗示されている。突然の嵐のため彼等は急いでその難を避けるために森に逃げ込むことになる。森は嵐から三人を守ってくれたため、彼等は共に「楽しさで足どりも軽く」(Led with delight: I. i. 10) さらに森の奥へと進んで行くのである。道は幾条にも分かれている。彼等の選んだ道というのは最もよく踏みならした道であった。よく踏みならした道は迷宮に通ずる道であり、「迷妄の洞穴」(Errours den: I. i. 10) への道だったのである。赤十字騎士は「決然たる勇気にあふれて」(full of fire and greedy hardiment: I. i. 14) 迷妄の洞穴に向い、そこに住む怪獣に立ち向かおうとする。しかしこの行動は真の勇気から生じたものではなく、むしろ恐れを知らぬ未経験者の慢心から生じたものといえるであろう。さらに信仰に支えられていると過信しているところに赤十字騎士の軽信がある。ユーナと小人は赤十字騎士の突進を思い止まるように忠告するのであるが、彼は聞き入れず突進するのである。そこには猪突猛進という人間共通の本能が暗示されているともいえるであろう。その怪獣は上半身が女の姿をしており、下半身は蛇の姿である。尾の先端には生命を奪う毒針をもっている。この毒針とは性的欲望を象徴しており、さらにアダムを誘惑したときのエヴの性行へと結びつく比喩なのである。また同時に赤十字騎士がやがて誘惑に陥ち入るということを暗示している言葉とも受け取れる。怪獣は赤十字騎士の楯(十字架)に攻撃を加え、さらに彼の身体を「果てしない尾」(endless train: I. i. 18) で巻きつける。赤十字騎士は「理性」の力で「信仰」を呼び戻し、「信仰の力を武力に加える」(Add faith unto your force: I. i. 19) ことによって、ようやく怪獣を斃すことができたのである。

しかし森から脱出した彼等を待ち受けるものは悪の力であるアーキメィゴーであった。アーキメィゴーは肉の弱さ、墮落への道を示す擬人化の代表的人物であって、彼の行動はサタン的でありまたプロテウスのように変身し、ケオスを引き起す魔法使いでもある。早速アーキメィゴーは

彼等三人を自分の庵に誘惑するのである。すでに日は暮れている。「太陽と一緒に休むべきときには休む」(with the Sunne take Sir, your timely rest: I. i. 33) のは人の常であるが、そこには大きな畏があることに気づかなければならない。スペンサーの場合、昼と夜とのイメージは善悪を構成する最も重要な要素なのである。陽は蔭と対照し、光は闇と、昼は夜と対照し善と悪へ志向する。さらに森は罪と悪を暗示する悪意の象徴でもある。彼等が誘惑されるのは何時もそうした状況下においてであった。赤十字騎士は先きほどの「迷妄」という怪獣を征服したけれども、偽善の仮面を着けているその老人の正体を看破することができない。「真理」のユーナも「理性」の小人も赤十字騎士と同様に、老人の正体を看破することができない。それはなぜか。「偽善」を見破るのは「真理」であり、「理性」でなければならない。そこにアレゴリーの煩わしさがある。抽象が具体に徹するとき、描写はリアルとなる。そのとき「真理」、「理性」であることよりも、生々しい血肉をもった一女性となり、一人の従僕となる。人間共通の脆さがここに浮びあがってくるのである。さらにプロットの構成上からみてもこの場の謎は解けてくる。それは彼等三人が最初から正常な順位を守って出発しなかったことにある。すでに述べたように、彼等は真の三者一体ではなく形だけのそれであった。最初の躓きは一種の波動状態となって、この場にもその影響があらわれているのである。そのために彼等は苦悩し続けるのである。

彼等三人を自分の庵に誘い込んだアーキメィゴーは、先ず「神聖」と「真理」とを引き離す策略を立てるのであった。二人を引き離すことがアーキメィゴーの意図なのである。彼等がやがて「死のような眠りに落ちたのを見届ける」(when all drownd in deadly sleepe he findes: I. i. 36) とアーキメィゴーはすばやく書斎に行き、魔法の本のなかから人の心を悩ます強力な呪文を探し出すのである。そして二つの悪霊を呼び出し、一方の悪霊を地下界の「夢の神」モーフェウス (Morpheus) の許へ遣わして「淫猥な夢」(false dream: I. i. 43) を借り受け、それを赤十字騎士の頭に注ぎ込むのであった。他の悪霊はユーナと「そっくりそのままの女性」(Whose semblance she did carrie vnder feigned hew: I. i. 46) に変容され、艶かしい姿態で赤十字騎士を誘惑するのである。心理的面からみれば、この色慾の夢は赤十字騎士の心奥に潜む性的欲望を暗示するものとして解釈することも可能であろう。また倫理的立場からみれば、理性と感情の激しい対立を暗示させ、善悪の葛藤を意味しているとも受け取れる。夢のなかに現われるユーナは例のヴェールを着けておらず、しかも艶かしい姿態で赤十字騎士に言い寄るのである。しかし赤十字騎士はその急変したユーナの態度に驚き、かつ憤り、必死になって彼女のその不心得を論じたため、その魔術の威力もついに半減する。するとアーキメィゴーはさらに別の策を立てるのである。その策略とは偽ユーナと若い騎士とに仕立てた別の悪霊に淫らな振る舞いをさせ、その光景を赤十字騎士に目撃させるという仕組なのであった。したがって赤十字騎士の眼には「悪い人たちがヴィーナスの破廉恥な鎖でしばり合っている」(wicked wights/Haue knit themselues in

Venus shamefull chain: I. ii. 4) という幻影が浮びあがってくる。完全にアーキメィゴアの魔術に陥ち込んだ赤十字騎士は、ユーナが本当に不義の行為によって自分を裏切ったものと信じ、翌朝未明に小人を連れてその庵を立ち去るのである。

ここでアーキメィゴアは赤十字騎士とユーナを「二つに分けることができた」(diuided into double parts: I. ii. 9) のである。この「二つに分けられる」ということは言うまでもなく赤十字騎士の自己分裂の状態を示すものであり、さらにその効果をより鮮明に印象づけるため、物語を二分して展開するという叙述方法がとられているのである。一方においてユーナは自分が気づかない偽赤十字騎士(アーキメィゴア)に身を委ね、他方においては赤十字騎士が偽ユーナ(デュエッサ)に追従して迷妄の状態から抜け出すことができず、絶えず不幸に虐げられるというプロットになる。すなわち二分されて展開する物語は赤十字騎士の心の動きを具体化したものとみるべきである。そのための補助的役割として、さまざまなエピソードが設定されているのである。この叙述方法にはキリスト教徒の姿が暗示されているともいえるであろう。そこには善なるものに気づきながら半ば悪に身を委ねて苦悩する自己自身の姿がある。その苦悩する赤十字騎士を如実に示すために、二分されて展開する物語は絶えず交互し、補足し合って「第一巻」を形成してゆくのである。

III

ユーナの不義に激情した赤十字騎士は理性を失い、「悲しみが正道を踏みはずす」(griefe led him astray: I. ii. 12) ほどの状態となってしまった。このような錯乱状態の彼を待ち受けるものは「無信」サンズフォイ(Sansfoy=Faithless: <O. F. Sans=without, for=faith)という異教徒の騎士であった。その騎士の側には「高価な金と真珠で縁どりされた真紅の衣を纏った美女」(A goodly Lady clad in scarlet red, / Purfied with gold and pearle of rich assay: I. ii. 13) がいる。彼女の名はフィデッサ(Fidessa=Fidelity)という。実はこの女はデュエッサ(Duessa=Falsehood)と呼ぶ魔女であり、「第一巻」を通して絶えず赤十字騎士に付き纏いさまざまな奸計をめぐらして、彼を苦しめることになるのである。しかし赤十字騎士にとって当面の敵はサンズフォイである。一進一退の末、幸いにも赤十字騎士はサンズフォイを斃すことができた。しかし彼の女フィデッサは自分の騎士が「こわれた塔の古い残骸のように倒れる」(fall/Like the old ruines of a broken towre: I. ii. 20) 姿を見ると、憐れな死を悼もうともせずその場から逃げ去ってしまうのである。赤十字騎士は急いでその女の跡を追い、間もなく追いつくと女は命乞いをして涙ながらに、自分の惨めな境遇を赤十字騎士に語るのである。もちろんその女の上話が奸計であることは言うまでもない。しかし赤十字騎士にはその身の上話が奸計であるということを看破するだけの理性の力がない。それどころか彼女の惨めな境遇に同情し、さらに護

送すると彼女に約束までするのである。ちょうどユーナの不幸な境遇に呼応するかのように、その女は「広い西の国を支配下におきティベリス川のほとりに王座を高々と定めていた王の一人娘」(the sole daughter of an Emperour, / He that the wide West vnder his rule has, / And high hath set his throne, where Tiberis doth pas: I. ii. 22) であるという。そして婚約者の王子が逆賊の手によって命を奪われたこと、そしてその遺骸を探し求めて諸国を遍歴するうちに、サンズフォイに出会い無理矢理に連れ去られたというのである。まさに同情を誘う筋書である。この策略が赤十字騎士を待ち受けていた第二の罠であったのである。赤十字騎士は老人に化けたアーキメィゴの魔術にかかったように、ここでも美女に化けた魔女デュエッサの術中に陥ち入ってしまうのである。これまでもデュエッサの魔力に屈した騎士の数は夥しい。

しばらくデュエッサを伴って旅を続ける赤十字騎士は疲れを癒すために、とある樹下に立ち寄ることになるのである。実はこの樹木も魔女デュエッサの奸計によって樹木に化せられ、荒地のなかで苦悩し続けているのであった。かつてはフラデュービオー (Fradubio=Doubt) という騎士であった。フラデュービオーの物語によれば、彼はデュエッサの誘惑に陥ちて愛人フレリッサ (Fraelissa=Frailty) を棄て魔女デュエッサと淫らな日々を送るようになり、やがてデュエッサの醜悪な正体を垣間みたため、その罰として樹木に化せられたというのである。そしてその罪から救われるには「生命の泉」(a liuing well: I. ii. 43) に浴さなければならぬというのであった。このようにデュエッサはさまざまな策略を用いて多くの騎士を破滅させているのである。ここに提示したスペンサーの意図は信うべき者が当然陥ち入る悲劇的末路をアレゴリー化したものといえるであろう。

しかし赤十字騎士はこのように降下への道をたどるけれども、まだ救い難い墮落の状態にまでは至っていない。そのことはサンズフォイとの戦いが例証しているであろう。異教の騎士に敵対する赤十字騎士にはいまなお信仰へ向かおうとするキリスト教徒の一面が窺われているからである。赤十字騎士は自分が陥ち込んだ幻影に多少気づいてはいるが、そこから抜け出すだけの理性の力がない。そのことを最も明瞭に示しているのはフラデュービオーに関するエピソードであろう。そこには束の間の真なるものの姿がある。不安、恐怖に怯える赤十字騎士の心的態度を最も鮮明に具象化したものがこのエピソードなのである。フラデュービオーは森そのものの一部となっている。すでに述べたように森は罪と悪を暗示する悪意の象徴である。もはや信仰も希望も愛も存在しない。したがってこのエピソードの役割は赤十字騎士にとって瞬間的に一瞥し得た自己自身の心的状態の場ともいえるのである。

赤十字騎士の降下への道は「高慢の館」(House of Pride) を経てさらに深まり、巨人オーゴリーオー (Orgoglio=Pride) の住む森に至って決定的墮落となるのである。「高慢の館」には道徳劇の「七大悪」(the seven deadly sins) のように、高慢の化身ルーシフェラ (Lucifera=Pri-

de) という女王を中心に「怠惰」(Idleness), 「貧食」(Gluttony), 「好色」(Lechery), 「貧欲」(Avarice), 「羨望」(Envie), 「憐怒」(Wrath) がいる。彼等はそれぞれの名が示すように、その本性に従って女王ルーンフェラの命令に服するよう養成されているのである。また彼等には各々野獣の従僕が侍っている。「怠惰」には「ロバ」(Asse) が従い、「貧食」には汚い「豚」(Swyne) が、「好色」には「山羊」(Goat), 「貧欲」には「駱駝」(Camel), 「羨望」には「狼」(Wolfe), 「憤怒」には「ライオン」(Lion) が侍っているのである。また女王ルーンフェラには華麗さでは随一の「孔雀」(Pecock) が侍っている。「孔雀」が「高慢」の象徴であることは、すでにラテン文学者オウイデイウス (Publius Ovidius Naso: 43 B. C.—A. D. 17?) の「転身物語」(Metamorphoses) に描き出されている。スペンサーがギリシャ・ラテン文学の影響を受けていることは言うまでもなからう。次の「ロバ」は「怠惰」の象徴であり、また「怠惰」はすべて悪徳の源泉であるともいわれている。この関係もまたすでにチャーサー (Geoffrey Chaucer: 1340?—1400) の作品、「第二の尼の話序歌」(Second Nonnes Prologue) に提示されている。「怠惰」はつねに「黒い衣と薄い白の上衣を纏い、勤行を始めようとしている僧侶」(Arayd in habit blacke, and amis thin, / Like to an holy Monck, the seruice to begin: I. iv. 18) に類似されている。しかし日課経 (Protesse) は殆んど読んだことがない。その生活は乱脈を極めていている。中世以来、僧侶が酒色に耽っていたことはさまざまな文献から指摘されているところである。スペンサーの皮肉な視線が僧侶に向けられていることは明白であろう。次に「豚」は「貪食」と結びつき、さらに貪欲、不潔とも結びつく。またしばしば悪事に陥ち入り易いという点で、「貪食」との組み合わせは最適と考えられる。「貪食」の腹は「贅沢のため膨れ上がり、眼まで肥って膨れ上がっている」(was vp-blowne with luxury, / And eke with fatness swollen were his eyne: I. iv. 21), そして「貪食」は葡萄の葉を身につけ、つねに片手に盃を持っている。泥酔した身体、とくにその下半身は獣に似ているという。この描写はまさにギリシャ神話における老シレンス (Silenos) に酷似しているといえよう。次の「好色」に対する「山羊」の関係については、古来「山羊」は好色な動物とされてきた。山羊の白く濁った目は猜疑心のために、絶えず動いている嫉妬の目と考えられる。「好色」は粗野で色が黒く、緑の衣を着ているのは汚い身体を隠すためであった。緑色は嫉妬、淫欲の色といわれている。「好色」はつねに情火を持っており、「自分の肉欲の針に獲物をひっかけるために、さまざまな術策を弄する」(thousand other wayes, to bait his fleshly hookes: I. iv. 25) のである。淫蕩な生活のため、梅毒におかされて苦しんでいるのが「好色」である。次の「駱駝」も「貪欲」の象徴とみなされたのは古代からである。ヘロドトス (Herodutus: B. C. 484?—B. C. 425?) の時代に東方諸国は不思議な財宝の国として考えられていたし、また「駱駝の国」とも呼ばれ、さまざまな悪と結びついて貪欲そのものとなったのである。また「イザヤ書」(Isaiah) にもすでにその関係が言及されている。「貪欲」は「す

り切れた上着をつけ、継ぎはぎだらけの靴をはいて」(thred-bare cote, and cobled shoes he ware: I. iv. 28), 財宝をかき集めるのが無上の楽しみなのである。次の「狼」は悪意、残忍を兼ね備え、「羨望」と結びつく。「羨望」は他人の幸福を最も妬み、不幸をみると無上の喜びを感じるのである。したがって善行を嫌い、信仰心を軽蔑する。つねに「悪意に満ちた毒」(spightfull poison spues: I. iv. 32) を吐きかけるのである。次の「ライオン」と「憤怒」の関係であるが、ここでは御されることを嫌う性質として「ライオン」が「憤怒」と結びつくのである。激しい復讐心を表わしているともいわれている。「憤怒」はつねに燃えさかる炬火を持っており、胆汁に苦しめられている。さらに「膨脹する脾臓と荒れ狂う精神錯乱」(The swelling Splene, and Frenzy raging rife: I. iv. 35) とが「憤怒」の性格を巧みに象徴しているともいえる。以上が「高慢の館」に仕えている悪徳の面々である。

ここに示された悪徳のページェントは降下してゆく赤十字騎士の心理状態を絵画的に具象化したものであることは明白であろう。もちろん「高慢の館」における悪徳は赤十字騎士にとって内敵であると同時に外敵でもある。善と悪との間にあって翻弄される赤十字騎士の姿は道徳劇にみられる脆い人間の姿と酷似している。その場から逃れ出ようと努力すればするほど彼の心は傷つくばかりである。そして掻き苦しみの頂点に達したとき、赤十字騎士はついに「憤怒」そのものように激情してしまうのである。サンズジョイとの激突がそのことを最もよく明示してくれるのである。赤十字騎士が突然「憤怒」の虜となったのではない。すでに「憤怒」の徴候は「第一巻」の最初からあらわれていたのである。赤十字騎士の乗った馬は「猛り立つ馬」であったことを思い出さなければならない。すなわち「猛り立つ馬」は赤十字騎士の属性であったともいえるかも知れない。そしてその「猛り立つ」感情はアーキメーゴやデュエッサの悪の力が加わり、サンズフォイとの激突によってさらに強くなり、この場に至ってその極点に達したのである。ちょうど「憤怒」は拡大増強して「無喜」(Joyless) となって現われるのである。「無喜」の擬人化はサンズジョイ (Sansjoy=Joyless) であるが、彼は兄サンズフォイの仇を打つべく赤十字騎士に襲いかかるのである。しかし高慢の化身ルーシェラの調停でひとまず剣をおさめ、翌朝早々に試合をすることに取り決められた。その夜遅く魔女デュエッサは秘かにサンズジョイの許を訪ね、自分は貴方の兄の恋人であったので、ぜひともその仇を打ってほしいと頼むのであった。そしてさらに「貴方の兄の魂は迷い続けている地獄の河の岸边から、この世の貴方に呼びかけている」(that calles to you aboue / From wandring Stygian shores, where it doth endlessse moue: I. iv. 48) とサンズジョイを鼓舞するのである。その言葉を聞いてサンズジョイは勇み立ち、必ず明朝赤十字騎士を打ち倒してみせると豪語するのであった。

次の朝になり、ラッパの吹奏を合図に試合が開始される。試合場には魔女デュエッサとかつてサンズフォイ「無信」が所持していた楯とが、その日の勝者への賞品として人目につく場所に

置かれている。激しい戦いの後、サンズジョイの剣を受け損じて赤十字騎士はよろめいたため、勝利は決ったものと早合点した魔女デュエッサは喜びのあまり「楯は貴方のもの、そして私も」(Thine the shield, and I, and all: I. v. 11) と叫んだ。ところがその言葉は自分に対する激励と取り違えた赤十字騎士は奮起して、ついにサンズジョイに瀕死の重傷を負わせたのである。すると突如として妖しい雲がサンズジョイを覆い隠してしまった。形勢不利と判断した魔女デュエッサは魔法をもって、サンズジョイを救いそのまま地獄へ連れ去り「閻の女王」プルートー(Pluto)を訪ね、深傷を受けたサンズジョイの治療を依頼するのである。やがて魔女デュエッサは再び「高慢の館」に戻ってみると、赤十字騎士はすでにそこを立ち去っていた。なぜならば赤十字騎士はデュエッサの魔術にかかっていたけれども、彼の侍者である小人「理性」の警告によって始めて心の迷いが解けたからである。小人はすでに「高慢の館」のただならぬ状況を察知していたからであった。ある時、地下から洩れてくる呻吟の声を聞き探索してみると、ルーシフェラに捕えられた無数の犠牲者たちが恐怖のために震えあがっていたのである。小人からの警告で赤十字騎士は「高慢の館」の真相が判明したので、早速その危険な場所を離れたのである。

「真理」(ユーナ)と離れた「神聖」(赤十字騎士)は「虚偽」(デュエッサ)に唆されて、「高慢」をはじめ、「怠惰」、「貪食」、「好色」、「貪欲」、「羨望」、「憤怒」という、いわゆる「七大罪」の誘惑を受け、その結果生の喜びを失いそして「無喜」との闘争はかなり困難を極めたが、ついに勝利を得る。最後に「神聖」は「理性」の忠告によって、「高慢の館」から逃れ去るのであった。

IV

赤十字騎士に見棄られたユーナは彼の不可解な仕打に悩み苦しみながらも、彼を慕って跡を追っていたのである。ある日旅の疲れを癒すために人目につかない木蔭で身を横たえることになる。はじめてユーナ的美貌が明示されるのはこの場においてであった。ヴェールをはずし、黒の長衣を脱いだユーナからは「天上の美」(heavenly grace: I. iii. 4) に等しいほどの美しさが示されるのである。しかしこの場に突然一匹のライオンが現われ、ユーナに襲いかかろうとするが、ユーナの神々しい姿に打たれて好意を示すほどになる。たしかにこの場におけるライオンの出現は如何にも奇妙で、唐突な感じさえ与えるが、しかしこの描写には美が最も強いものを支配するというアレゴリーの強調された作用とみななければならないであろう。ライオンが真の処女に対して危害を加えないのはロマンスの世界において常石なのである。

ライオンはそれから以後、ユーナの最も忠実な従僕として侍くようになる。ライオンを連れて旅立つユーナは、やがてコーシカ(Corceca=Blind heart)という盲目の老婆とその娘アベッサ(Abessa=Abject)の家に宿泊することになった。だがそこへアベッサの恋人カークラパイン(Kirkrapine=Churchrobber)という教会荒しがやって来ると、ライオンはその男に襲いかかっ

て殺してしまう。彼等がユーナの敵であることは言うまでもない。

旅の疲れを癒したユーナは早朝にライオンを連れて、再び旅を続けるのである。しばらく旅を続けていると、突然赤十字騎士の姿がユーナの眼に映ったのである。ユーナは喜び涙しながら赤十字騎士のもとに近づくのであるが、実は真の赤十字騎士ではなく、魔法使いのアーキメィゴーがユーナを誘惑しようとして赤十字騎士に化けた「偽の赤十字騎士」だったのである。しかしユーナは以前と同様に、そのアーキメィゴーの正体を看破することができない。それどころか真の赤十字騎士と思ひ込み、喜びながらも自分が見棄てられたことについて怨言を述べるのである。しかし赤十字騎士に会うことができたということで、ユーナは無上の喜びを感じるのであった。

やがて真の赤十字騎士に斃されたサンズフォイの弟サンズロイ「無法」(Sansloy=Lawlessness)が現われ、偽の赤十字騎士に向って兄の仇と打ってかかるのである。たちまちのうちに偽の赤十字騎士アーキメィゴーを打ち倒し、止めを刺そうとして兜を脱ると、顔見知りのアーキメィゴーなのでそのままにしておく。そして悲嘆に暮れているユーナに近づくと、ライオンが飛びかかってユーナの危機を救おうとするが、ついにサンズロイの剣で斃れてしまう。かくて唯一の守護者であるライオンを失ったユーナは悲鳴をあげながらサンズロイに攫われてゆくのである。

ではこのライオンとは一体何のアレゴリーであろうか。「暴力」(Violence)という解釈もあれば、「道理」(Reason)を象徴するという見方もある。しかしむしろ「真理」と単純な自然の一致という点からみれば、⁽¹³⁾「自然法」(Law of Nature)と解釈した方が適切かも知れない。すなわち「真理」(ユーナ)と「単純な自然」(ライオン)との結合によって、「盲信」(コーシカ)、「迷信」(アベッサ)を擁護する「教会の敵」(カークラバイン)を打破することができた。しかし神聖を装う「偽善」(アーキメィゴー)に計られ、「偽善」は「真理」(ユーナ)の擁護者の素振りを見せるが、「無法」(サンズロイ)の前にその正体を曝け出し、「単純な自然」(ライオン)もまたその「無法」の前に屈服した。しかし自然法が無法に屈するのは一時的現象であって、やがてその威力は別の形となって発揮されるようになるのである。

ユーナを奪い去ったサンズロイ(無法)は、ある森の中へユーナを連れ込んで獣欲を満たそうとする。その時ユーナの悲鳴を聞きつけてサター(Satyr)、フォーン(Faune)の半獣半人たち(ともに森の神々である)が現われ、サンズロイを取り囲んだので彼は恐れてユーナを置いて逃げてしまう。森の神々をはじめ多くの森の住人たちは天使のような清純な美に打たれて、ユーナを女神として恭しく彼女に侍くのである。

しばらくしてサターと人間との間に生れたサティレィン(Satyrane)と呼ぶ騎士が、この森に帰ってきたのである。サティレィンはユーナから身の上話を聞いて深く同情し、ユーナの願望を達成させると誓い、すぐに彼女を連れて赤十字騎士を探しに出かけるのである。間もなく巡礼姿の老人から赤十字騎士は異教の騎士に殺され、その異教の騎士は近くの泉で傷口を洗っていると

いう話を聞かされた。サティレインは直ちに赤十字騎士が殺されたという場所へ急行すると、赤十字騎士の姿はなく異教の騎士だけであった。その異教の騎士とはサンズロイだったのである。遅れて辿りついたユーナの姿を見たサンズロイは、サティレインを無視してユーナに襲いかかろうとする。そこで彼等は激突するのであるが、その光景を物蔭から見守っていた巡礼姿の老人は、逃げ去るユーナに気づき、その跡を追うのである。実はこの巡礼姿の老人とは例の魔法使いアーキメィゴーだったのである。アーキメィゴーはユーナを「最後の破滅に追い込もうと」(In hope to bring her to her last deecay: I. vi. 48) 必死になって追うのである。

一方プルートの「闇の国」から「高慢の館」に帰って来た魔女デュエッサは、赤十字騎士がすでにそこを立ち去っていたことを知り、急いでその跡を追うのである。たまたま森の奥深くの泉のほとりへ来ると、デュエッサは疲れた身体を休めるために「鎧を脱いで休んでいる」(Disarmed all of yron-coted Piate: I. vii. 2) 赤十字騎士の姿を見出した。デュエッサは自分を見棄てたことについて、赤十字騎士の不信を責めるのであるがすぐに仲直りする。赤十字騎士は喉の渇きを癒すために泉の水を飲むのである。しかしその水はかって「処女の女神」ダイアナ(Diana)の呪いを受けた魔の泉だったので、たちまち彼の手足は委え、「生き生きとした血は冷えて弱まり、その衰えが熱病の発作のように全身に拡がる」(chearefull bloud in faintness chill did melt, / Which like a feuer fit through all his body swelt: I. vii. 6) のであった。

やがて恐ろしい物音と共に、オーゴリオー(Orgoglio=Pride)という巨人が現われ、樫の木を引き抜いて赤十字騎士に襲いかかるのであった。オーゴリオーは「風の神」イーオラス(Aeolus)と「大地」ガイア(Gaia)から生まれた巨人で、「その背丈は最も背の高い人間の三倍以上もある」(his stature did exceed / The hight of three the tallest sonnes of mortall seed. I. vii. 8) という。手に持つ樫の木は敵を打ち負かす必殺の武器なのである。泉の水のために関節も血管も衰えてしまった赤十字騎士は、甲冑をつける時間すらなくまた剣を揮うことすら困難であった。かろうじて巨人の一撃を免れたが、その地響に赤十字騎士は転倒し気絶してしまうのであった。さらに「粉々に打砕いてしまおうとして」(him to dust thought to haue battred quight: I. vii. 14) 巨人は例の樫の木を振り上げると、魔女デュエッサはそれを制して次のように訴えるのである。

O great Orgoglio, greatest vnder skye,/O hold thy mortall hand for Ladies sake,
Hold for my sake, and do him not to dye,/But vanquisht thine eternall bondslaue
make,/And me the worthy meed vnto thy Leman take./(I. vii. 14)

したがって巨人はデュエッサの願いを聞き入れ、意識不明の赤十字騎士を自分の城へ運び、そして地下牢に投げ込んでしまうのであった。デュエッサは巨人の情婦となり、「深紅の衣を纏い、三重冠を高々と頭に載せ」(gold and purple pall to weare, / And triple crowne set on her

head full hyr : I. vii. 16), さらに七つの頭をもつ怪獣に乗り, 奢侈淫逸の生活に耽るのである。この場にみられる歴史的アレゴリーはローマ教会の墮落と虚偽を諷刺したもので, とくに「三重冠」はローマ法王の冠を暗示しているとも言われている。またこの場におけるサンズロイとオーゴリーオーは互に補足的役割としてかなりの効果をあげている。そこでは理性の欠如が獣性に符合しているのである。サンズロイがユーナを捕えた意味はオーゴリーオーの勝利の前兆とも受け取れる。しかしユーナは強姦されてはいない。スペンサーはオーゴリーオーを登場させる前に, 神の恩寵によってユーナが救われるように考案しているのである。すなわち森の住人たちの間でのユーナの行為は心理的面と神学的面とを巧みに組み合わせた「再生」の前兆を示すアレゴリーなのであった。再生は先ず第一に神の恩寵によらなければならない。恩寵の作因は森の住人たちの間に存在していたのである。彼等は「永遠の恩寵」(Eternal providence)を通して無力なユーナを救出するために, サンズロイを森から追い払ったのである。森の住人たちは半ば人間の自然な欲求を留めてはいるが, しかし彼等は無垢である。したがってサンズロイのように野獸的欲情や罪は有していない。ライオンが示したように, ユーナに対する彼等の態度は尊敬と盲目的献身とであり, 「彼女の足に接吻し, 嬉しげな顔をして機嫌を伺う」(Do kisse her feete, and fawne on her with count'nance faine : I. vi. 12) ほどであった。

またこの場でとくに注目すべきことはサティレインの行動であろう。彼は倫理的意志のアレゴリカルな役割として登場し, ユーナを森から平原へ護送する。彼によって示される倫理的意志とは悪の力を阻止することであり, さらに理性を堅持することにある。いまや精神的位階が徐々に回復され, そのことをより一層強めているのは小人がオーゴリーオーの場から脱出して, 再びユーナのもとへ戻って来たことである。ユーナが「三度失神し, 三度小人によって介抱されて, 息を吹き返す」(Thrise did she sinke adowne in deadly swownd, / And thrise he her reviu'd with busie paine : I. vii. 24) のは小人から赤十字騎士についての報告を聞いたからであった。しかしこの言葉はちょうどキリストが死から復活するように, 赤十字騎士が精神的死(墮落)から蘇生することを想起せしめる。ユーナに報告する小人の次の言葉は赤十字騎士のこれまでの経過を端的に表わした言葉であるが, その言葉の背後には彼が自己の過失に気づき, 悔い改めて立ち上がろうとする懺悔の言葉とも感じられるのである。

The subtill traines of Archimago old : / The wanton loues of false Fidessa faire, /
Brough with the bloud of vanquish Paynim bold : / The wretched payre transform'd
to treen mould : / The house of Pride, and perils round about ; / The combat, which
he with Sansjoy did hould ; / The lucklesse conflict with the Gyant stout, /
Wherein captiu'd, of life or death he stood in doubt. / (I. vii. 26)

赤十字騎士はいまや盲目的本能から脱し, 倫理的的生活に向かおうとするのである。彼は謙譲と

自己認識を通して再び信仰の道に立ち帰らなければならない。その媒介者として登場するのがアーサー王子 (Prince Arthur) なのである。アーサー王子とユーナとの短い対話のエピソードはこれまでに起ったすべての事件を概括するための機能といえるであろう。森の住人たちからローマ的騎士のサティリオンを通してアーサー王子へ達する赤十字騎士の過程は、ちょうど原始的状態からローマ的文化を経由してキリスト教的啓示へ達しようとするキリスト教徒の姿勢に一致する。神学的立場からみれば、この場におけるアーサー王子は「旧約」(the Old Law) と「新約」(the New Law) の役割を演じているとも考えられる。なぜならばアーサー王子の兜は「燦然と輝き、見る者に恐れを抱かせる」(Both glorious brightness, and great terrour bred: I. vii. 31) と同時に、次の一節には豊饒と聖なる喜びとが満ちあふれているからである。

Like to an Almond tree ymounted hye/On top of green Selinis all alone,/With
blossomes braue bedecked daintily;/Whose tender locks do tremble euery one/
At euery little breath, that vnder heauen is blowne./(I. vii. 32)

この咲き誇るアーモンドは「民数記」(Numbers)⁽¹⁴⁾からの影響によるもので、「アaronの杖」(Aaron's rod) への言及として重要な意味をもっているのである。したがってこの場におけるアーサー王子の役割は「新約」を予示している「旧約」のアレゴリカルな意味をもっているのである。「一卷」におけるアーサー王子は「救済する人」であると同時に「救済される人」でもある。最も一般的な意味においては、アーサー王子は人間救済者としてキリストを暗示している。しかし巨人オーゴリーオーの一撃でアーサー王子が地面に倒れ、死の危険に曝されたとき、彼を救ったのは楯の力であった。なぜならば彼が地面に倒れたとき、そのはずみでダイヤモンドの楯の覆がとれ、その楯はただちに光り輝き、あたかも「天の光を凌駕する」(that heauens light did pas: I. viii. 19) ようにあたり一面に光を放ち、何人もそれに目を向けることができなかつたからである。もちろん巨人オーゴリーオーはその楯を見て目がくらみ、地面に倒れたアーサー王子を殺そうとして「高々と振り上げた巨大な武器」(weapon huge, that heaued was on hye: I. viii. 19) も無力となり、ついに斃れるのである。アーサー王子はその光り輝く「信仰の楯」によって救われたのである。この場からは十字架上のキリストとさらに復活するキリストのイメージとが重なり合って浮かびあがってくる。墮落は楯によって救われるように、原罪はキリストによって贖罪されるのである。アーサー王子はキリストの肉体を貸り受けた完全な神聖の騎士なのである。彼の役割がキリスト教信仰の鑑であるのもそのためであった。

赤十字騎士の墮落の主なる原因は彼の感情から生れ出たものであり、信仰という真の救済力に無智であったところに墮落の原因があつたのである。アーサー王子は巨人オーゴリーオーを斃したあと、その無智なる牢獄から憔悴し切った赤十字騎士を救い出すことになる。ここに描かれているエピソードは「律法」(the Law) の牢獄から人間を救済するという「福音」(Gospel) のア

レゴリーとみるべきである。赤十字騎士の瘦せ衰えた身体をみれば、「どんな石のような心の持ち主でも不憫に思う」(Could make a stony hart his hap to rew: I. viii. 41) ほどであったからである。この石への言及はモーセの「石板」(Tablets of Stone) を暗示しているという解釈もあるほどである。巨人オーゴリオからは人間の墮落と同様に神の審判が浮かびあがってくる。そこには「律法」による当然の苦悩が背負わされているからかも知れない。罪そのものはそれ自身の苦しみによって贖われるように、赤十字騎士にとってアーサー王子への道に達するにはどうしても巨人オーゴリオの牢獄を経なければならなかった。このようにして赤十字騎士は救われたのである。ダイヤモンドの楯と同じように、キリストの血の入った「ダイヤモンドの箱」(a boxe of Diamond: I. ix. 19) をアーサー王子は赤十字騎士に与えるのであった。返礼として赤十字騎士はアーサー王子に「聖書」(Saueours testament) を贈るのであった。救済はここに至って完成する。赤十字騎士の罪は原罪であった。いまやその罪は贖われたけれども、彼は行動を通してその証を実証しなければならない。彼の過去における罪の深さは冒険という行為によって知ることができるけれども、新しい信仰への確信はまだ十分とはいえない。現在の段階では表面的なものにしかすぎないといえる。「無智の牢獄」から救出されたとき、赤十字騎士は極めて情緒的な基盤に結びついているだけで、真の自覚した状態とはなっていなかった。したがって最後の罪である「絶望」(Despayre) が赤十字騎士に攻撃をしかけるのもそのためであった。

赤十字騎士は「絶望」に接して老人のように動揺する。彼は瞬く間に罪の記憶によって崩れかかる。いまや赤十字騎士の心は「福音」ではなく「律法」によって支配されようとしているのである。すなわち「罪ある者はすべて死なしめよ。それが神の掟ではないのか。生ある者はすべて死すべし。そうではないのか」(Is not his law, / Let euery sinner die: Die Shall all flesh?: I. ix. 47) という言葉が彼のうえに伸掛かってくる。すると死とは「苦勞のあとの眠りであり、嵐の海のあとの港、戦いのあとの平和、生のあとの死であり、ともに楽しいもの」(Sleepe after Toyle, port after stormie seas, / Ease after warre, death after life does greatly please: I. ix. 40) となってしまう。このように「律法」へ志向する赤十字騎士に対して、ユーナは神の慈悲である福音に眼を向けさせて「あなたは天の恩恵にあずかっているお方ではありませんか」(In heauenly mercies hast thou not a part: I. ix. 53) と説得するのである。「絶望」を追い払うにはこの言葉だけで十分であった。しかし情緒に基づく彼の信仰では、真の信仰とはいえない。したがってユーナは赤十字騎士が「悪竜」退治の大業を達成するにはあまりにも心身の衰弱が著しく、回復にはかなりの期間が必要であることを悟り、聖訓と浄行をもって世に知られている修養道場「神聖の館」(House of Holiness) へ導いて行くことになる。真の信仰とは神、恩寵、正義、自由意志を獲得して後に得られるものなのである。「神聖の館」はキリスト教神学の館であることは言うまでもない。信仰から希望へと、そして愛の善行を経てはじめて「黙想の丘」

(the hill of Contemplation) に違することができる。そこに至ってこそ真の「神聖」といえるのである。

V

「神聖の館」は「高慢の館」と対照している場であり、つまり作品「第一巻」を支えている最も重要な場なのである。「高慢の館」を支配している女王ルーシフェラ（高慢）に相対立するものとして、「神聖の館」には老女シーリア（Caelia）がいる。シーリアとは「天から来た人」、「天に帰る人」という、つまり「天上の」（heavenly）人という意味がある。シーリアには三人の娘が仕えている。その名はフィデーリア（Fidelia=Faith）とスペランザ（Speranza=Hope）、そしてチャリッサ（Charissa=Charity）である。しかしチャリッサは現在出産のため床に臥しているの、彼等に対して歓迎の挨拶ができない。

赤十字騎士は早速、神、恩寵、正義、自由意志についての教えを受けることになり、その結果はじめて「神聖」を獲得することになるのである。先ず第一に、赤十字騎士は白髪の老人ヒューミルタ（Humilta=Humility）に案内されて、「狭い道⁽¹⁶⁾」を通して、中庭に出る。中庭には「熱意」（Zele）を意味する「地主」（Francklin）が待っており、広間へ導かれる。広間には地味な服を身につけている「尊敬」（Reuerence）に迎えられ、先ずフィデーリアのもとへ案内される。フィデーリア（信仰）の顔は陽光のように輝き、「天の光のように」（Like heauens light: I. x. 12）輝いて見える。百合のように白い服を纏い、右手には水で割った葡萄酒がなみなみと入った「黄金の盃」（a cup of gold）を持ち、その盃のなかには「一匹の蛇」（a Serpent）が入っている。もちろん「黄金の盃」とは聖餐用の盃であり、水割りの葡萄酒とはかつて聖餐式に用いた原始キリスト教信者にあやかっていたことである。また蛇は悪の象徴として用いられることが多いけれども、ここではそれに対する反対の属性、つまり治療力を象徴している。フィデーリアの左手には一冊の書物がある。その書物とは「血で署名捺印され、理解し難い不思議なことが書かれている」（that was both signd and seald with blood, / Wherein darke things were writ, hard to be vnderstood: I. x. 13）書物であって、いわゆる新約聖書のなかの「黙示録」、「ペテロ後書」なのであった。妹のステランザ（希望）は青い服を着て、腕には「銀の錨」（a siluer anchor）をさげている。青色は中世以来、「希望」を象徴する色である。また「銀の錨」とはヘブル書にみられる「この希望はわれわれの靈魂の錨のごとく安全にして動かず」（That hope we hold. It is like an anchor for our lives, an anchor safe and sure: Hebrews, 6. 19）という言葉からの影響とみることができる。

そこで赤十字騎士は直ちに召使である「服従」（Obedience）の手を借りて、武具を脱ぎ十分休憩をとった後フィデーリア姉妹から神、恩寵、正義、自由意志の教えを受けるのであった。

フィデーリアは「言葉で人の心を殺すこともできれば、自分が突き差した者の心に、生命をよみがえらせること」(with her words to kill, / And raise againe to life the heart. I. x. 19) もできるのである。スペランザからは、「銀の錨にしっかりつかまっている術」(how to take assured hold / Vpon her siluer anchor: I. x. 22) を教えられるのであった。

次に赤十字騎士は医師である「忍耐」(Patience) によって、彼の「良心の病」(disease of grieued conscience) を治療してもらう。赤十字騎士の病根である内部の腐敗と感染した罪は取り除かれ、その後彼の身体は「改心」(Amendment) に預けられる。そしてすっかり回復した彼は「苦行」(Penance) のもとへ案内されることになる。「苦行」のもとには「苛責」(Remorse) と「悔悟」(Repentance) が仕えている。赤十字騎士を待ち受けている「苦行」はきびしく鉄の鞭で彼をむち打ち、続いて「苛責」は彼の心を鋭く刺し、「悔悟」は彼の罪ある身体を塩水に浸し「汚れた罪のしみ」(the filthy blots of sinne: I. x. 27) を洗い流してくれるのである。

このように罪から清められた赤十字騎士はユーナが待ち侘びている控の間に戻るのである。そこには産褥を離れ、すっかり元気になったチャリッサ(純潔)が赤十字騎士を歓迎してくれたのである。チャリッサは黄色の衣服がよく似合い、女盛りで美しくそして貞節の持ち主であった。黄色の衣服は「結婚の神」ハイメンに結びつき、そしてその黄色は母性、豊饒、多産を象徴する色なのである。彼はチャリッサからさまざまな事柄を学びとることになる。

And taking by the hand thet Faeries sonne, / Gan him instruct in euery good
behest, / Of loue, and righteousness, and well to donne, / And wrath, and hatred
warely to shone, / That drew on men Gods hatred, and his wrath, / And many
soules in dolours had fordonne: / In which when him she well instructed hath, /
From thence to heauen she teacheth him the ready path. / (I. x. 33)

チャリッサから「天国へ至る道」を教えられた赤十字騎士は、間もなく「慈悲」(Mercy) のもとに預けられ、「慈悲」は彼に「高潔な魂」(righteous soule) を与え、そして祈禱者が住んでいる「聖なる接待所」(an holy Hospitall) へ彼を導いて行くのである。この「聖なる接待所」にいる七人の祈禱者とは、「高慢の館」に住む「七大罪」と対照され、いわゆる「七大徳」(the seven cardinal virtues) を象徴する人たちである。

彼等の歓迎を受けた後、赤十字騎士は再び「慈悲」に導かれて困難な道を進み、険しい山に至るのであった。その頂上には聖堂があって、そこには年老いた聖人「瞑想」(Contemplation) が住んでいる。聖人は日夜、神と善について瞑想しているのである。この山頂こそモーセが十誡を受けた「シナイ山」のアレゴリーなのである。そして「瞑想」の指示に従って、赤十字騎士ははるか遠くに見える美しい町を眺めるのである。その町というのは城や塔が「真珠や宝石で高く強く」(high and strong / Of perle and precious stone: I. x. 55) 築かれているという「エルサ

レムの町」(Hierusalem: I. x. 57)なのであった。赤十字騎士はついに「神聖」に違えることができたのである。もはや彼にとって血を流す戦いが如何に空しいものであるかということを実感として受け止めるようになったのである。悪竜退治の大業も無に感じられてきた。しかし「瞑想」はすでに赤十字騎士の表情からそのことを読み取っていたので、正義の敵を打ち滅ぼすことが真の騎士であり、したがって大敵「悪竜」を滅ぼしてはじめて「神聖」の騎士に至るということを論ずるのである。合わせて赤十字騎士の出生が古いサクソン王族の出であるという秘密も、「瞑想」によって初めて知らされるのである。かくて赤十字騎士は「瞑想」の指示に従って「瞑想の山」を下り、ユーナのもとへ帰えるのであった。

待ち侘びていたユーナは赤十字騎士の帰還を喜び迎え、「神聖の館」に別れを告げ、囚われの身となっている両親の救出のために彼と共に出発するのである。ユーナが赤十字騎士に対して、はじめて自分の愛を語るのもこの場においてである。

Dear knight, as deare, as euer knight was deare,/That all these sorrowes suffer
for my sake,/High heauen behold the tedious toyle, ye for me take./(I. xi. 1)

しかし二人の愛が成就するのは悪竜を退治した後であることは言うまでもない。二人が目的地に近づいたとき、「悪竜」はすでに二人の到来を察知して待ち伏せているのである。「悪竜」の身体は一面真鍮の鱗で武装されており、ちょうど「銅鉄の板を隙間なく綴り合わせた鎧のよう」(like plated coate of steele, so cooched neare: I. xi. 9)であった。尾の長さは三ファーロング(約八〇〇メートル)あり、鼻からは火を吐き口からは煙を吹き出すこともできる。竜が火や煙を吐き出すことはロマンスの世界ではごく普通のことである。また歴史的アレゴリーからみれば、この場における悪竜の描写は当時の敵国スペインの無敵艦隊(the Invincible Armada)を暗示している⁽¹⁷⁾ともいわれている。その「悪竜」の喉からは「燃える硫黄の息づまるような煙が絶えずもくもくと立ちのぼり、あたり一面悪臭と煙が立ちこめて」(Out of his stinking gorge forth steemed still, / That all the ayre abyre about with smoke and stench did fill: I. xi. 13)いたのであった。また喚くその声は冬の嵐のように烈風を生み、その様はあたかも「怒濤逆巻く海が吼えたけり、うねる大波は大地をゆるがそうと峨々たる岸边を打つかのよう」(The rolling billowes beat the ragged shore, / As they the earth would shoulder from her seat: I. xi. 21)でもあった。

赤十字騎士は応戦すべく槍を構え、満身の力をこめて「悪竜」に激突するのである。この戦いは二日間に渡って激しい死闘が展開されるが、ついに三日目にその「悪竜」を斃すことになる。第一日は互に傷つくけれども、致命傷とはならない。「悪竜」は左翼に大きな傷を負い、赤十字騎士も竜の吐く火炎のために全身火傷をして苦しむ。ついに夜になったため死闘は一時中断され、翌日にもち越されることになった。竜は痛む傷に耐えながら山へ引きあげてしまい、他方の

赤十字騎士は火傷の苦痛から足を滑らせて側にある泉に落ちてしまった。しかし幸いにもその泉から湧き出る水は聖なる水で、医薬として用いられている「生命の泉」(the Well of Life)だったのである。したがってその泉は死者を甦らせることも、罪を清めることもまた老衰した身体を若返らせることもできる。全身の火傷が直ちに回復することは言うまでもない。「生命の泉」とはまさにキリストの血の泉を意味しているのである。

朝を待ち侘びている赤十字騎士は朝日と共に、ちょうど「鷲が灰白色の老いた羽をぬぎ捨てた大洋の波から、若々しい羽毛に身を包んで現われるように」(As Eagle fresh out of the Ocean waue, / Where he hath left his plumes all hoary gray, / And deckt him selfe with feathers youthly gay: I. xi. 34) 泉から舞い上がり、「新しく生え出た翼の力を試す」(His newly budded pineous to assay: I. xi. 34) かのように竜を打つための身構えをするのであった。竜は昨日の傷で大分弱っていたが、赤十字騎士を見ると猛然と襲いかかってきた。待ち構えている彼は甦った力を試そうと「燦然と露に輝く刃を高々と振りかざして」(High brandishing his bright deaw-burning blade: I. xi. 35) 見事竜の脳天を叩き割ることができたのである。しかし竜は最後の力を奮い、火を吐き煙を吹き出して抵抗した。炎と煙の猛毒から身を守るために赤十字騎士は後退するのであった。その時また足を滑らせて泥沼に落ちてしまったのである。幸いにも側には一本の立派な木が生え茂り、その木には赤い果実が枝もたわわになっている「生命の木」(the Tree of Life)であった。その木からは香油がしたり落ちて肥沃な土地に染み渡っていた。またその香油は「生命と限りない健康とを与え、致命的な傷も癒し、埋葬されるばかりになっている亡骸をも甦らせることもできる」(Life and long health that gracious ointment gaue, / And deadly woundes could heale, and reare againe / The senselesse corse appointed for the graue: I. xi. 48) のである。香油の溜った泥沼に落ちた彼は死から救われたのである。他方の竜はその木の側に近づくことができない。なぜならば竜は死から生まれたので、生命を守るすべてのものを恐れていたからである。したがって竜は再び山へ引きあげてしまったのである。ちょうど「生命の泉」がキリストの血の泉を象徴していたように、「生命の木」はキリストの十字架であり、「アダムの木」(Adam's tree) の象徴とも考えられる。

香油によって救われた赤十字騎士は喜びの朝を迎え、ちょうど「美しいオーロラが老人タイソンの露けき寝床から、恥じらうように赤く頬を染めて起き上がるように」(fair Aurora from the deawy bed / Of aged Tithone gan her self to reare, / With rosie cheekes, for shame as blushing red: I. xi. 51) 立ち上がったのである。竜は赤十字騎士が連日の戦いで少しも傷を受けていなかったかのように、さっそうと起き上がるのを見て仰天し恐れをなした。赤十字騎士は飛ぶ鷹のように激しく迎え撃ち竜を後退させるのであった。そして絶えず冷静に対戦し、ついに赤十字騎士は竜の喉を切り裂くことができたのである。この象徴的な三日目の朝(キリストの

復活する日を意味する)に「悪竜」は力尽きて山が崩れるように斃れるのであった。

ユーナは最大の賞讃を赤十字騎士に与え、二人は喜び合いながら囚われの身であるユーナの両親のもとへ急行するのである。永い迫害から解放された城はたちまちのうちに歓喜の渦となった。そしてその歓喜の声はいつしか二人の婚姻に対する祝福の声に変わっていたのである。赤十字騎士がキリストと同化されるように、ユーナが彼女のヴェールを脱いでダイアナと同化されるのもこの時である。かつて赤十字騎士は喉が渇き、「水晶のような流れ」の泉の水を飲んだとき、彼の血は冷えて無力となった。それは怠惰なニンフたちを罰するためのダイアナの呪のためであったのだ。しかしいまやその泉はキリストの贖罪によって「清らかな泉」と変わったのである。ユーナは赤十字騎士に武具を脱がせ、彼女自身も従来までの禁欲主義的立場から脱し、「第三巻」におけるブリトマート (Britomart) のように結婚に向う豊饒の処女となるのである。神学的立場からみれば、ユーナはキリストの花嫁となる。「第一巻」におけるアレゴリーの特色は異常なほど心理的であり、神学的であった。スペンサーは見事な筆力でキリスト教的希望と絶望の過程を分析してみせてくれた。救いから罪へ、そしてまた救いへと一つの循環が行なわれた。そして「神聖」と「真理」が合体したとき、はじめて「神の愛」が成立することを確証してくれたのである。

註

- (1) A Letter of the Auther—Sir Walter Raleigh: Faerie Queene Book I, The Works of Edmund Spenser, p. 167.
- (2) *ibid*: p. 167.
- (3) Sir Philip Sidney: The Defence of Poesie, The Prose works of Sir Philip Sidney, Vol. III, p. 9.
- (4) *ibid*: p. 11.
- (5) A Letter of Auther—Sir Walter Raleigh, pp. 167—8.
- (6) A. C. Hamilton: The Structure of Allegory in The Faerie Queene, pp. 89—123.
- (7) M. Evans: Spenser's Anatomy of Heroism, p. 89.
- (8) Ephesian: 6, 13—18.
- (9) Metamorphoses: 2, 531.
- (10) The Prologe of the Seconde Nonnes Tale, The Complete works of Geoffrey Chaucer, Vol. IV, pp. 508—513.
- (11) William Langland: The Vision of Piers Plowman, 5, 422.
- (12) Isaiah: 30, 6.
- (13) H. S. V. Jones: A Spenser Handbook, p. 159.
- (14) Numbers: 17, 8.
- (15) Rosemond Tuve: A Reading of George Herbert, pp. 27—55.
- (16) Matthew: 7, 14.
- (17) M. Evans: Spenser's Anatomy of Heroism, p. 107.